プロデュースされた赤穂事件

---同時代史料から見えてくるものは??---

2024/12
真野信治

元禄十四年(1701)三月十四日松乃廊下刃傷事件

元禄十四年、東山天皇・霊元上皇の勅使院使が三月に江戸に向かうことが決定される。江戸期を通じての毎年の恒例行事である。二月四日、浅野内匠頭長矩・伊達左京亮村豊が、それぞれ勅使饗応役・院使饗応役として任命される。一方、勅使院使の下向を含む天皇と将軍の間の年頭挨拶全般を取り仕切っていたのが、高家吉良上野介義央である。

予定通り、両勅使は三月十一日に江戸に着き、翌十二日将軍綱吉に謁見。東山天皇からの挨拶を伝え、無事その役割を終えた。その後、彼らが京都帰還に際し、暇乞いのために登城した十四日に事件は起きた。浅野内匠頭が、吉良上野介に対し、江戸城内松の廊下で切りかかったのである。切りつけた浅野は、梶川与惣兵衛に取り押さえられ、切られた吉良は怪我をしたが命に別条はなかった。取り押さえられた浅野は田村右京太夫建顕に預けられ、即日切腹、赤穂藩は取りつぶし、御家は断絶となった。それに対し、吉良はお咎めなしであった。

元禄十五年(1702)十二月本所松坂町吉良邸への討ち入り事件

この一連の幕府処分に不服だった大石内蔵助良雄以下浅野家旧臣四十七人が、翌元禄十五年十二月十五日未明に本所の吉良邸に討入り、隠居生活をしていた義央の首を打ち取った。浪士らは吉良の首を泉岳寺の主君の墓前に捧げたのち、出頭。沙汰が決まるまで四か所の大名屋敷にお預けとなった。その後、幕命により切腹と決まり、二月四日に刑は執行され、主君とともに高輪の泉岳寺に葬られた。

事件当初の幕府の沙汰は、喧嘩ではなく単なる刃傷事件としていたが、いつの間にか、喧嘩両成敗という観念に押しつぶされたようだ。あまりにも片落ちの沙汰であると騒ぐ世間の風評に惑わされ、吉良邸をお城から遠くに移住させるなど、今度は一転して吉良家に対する扱いがひどいものとなってゆく。

☞☞☞　饗応役の指南役吉良上野介に賄賂を贈らなかったことで、それ以降何度もの嫌がらせを受け、嘘の作法を教えられ、大恥をかいてしまう内匠頭の姿はもちろん真実ではなく、歌舞伎や講談でつくられた創作である。このことを恨みに思い、内匠頭が上野介を斬りつけたという証拠は全く無いのである。

■梶川与惣兵衛頼照
直参旗本(55歳)　刃傷の際、一番近くにおり、内匠頭を取り押さえる
『梶川与惣兵衛日記』を残している

■多門伝八郎重共
直参旗本(44歳)　刃傷事件の聞き取り調査と刑執行の副検死役
『多門伝八郎覚書』を残している

『諫懲後正』(かんちょうこうせい)
「文道を学ばず、武道を好む」とあり「仁愛の気味なし」「知恵なく短慮」とまで言われている。かなり手厳しい論評であり、本当に信用していい情報なのかは俄かに断定は出来ない。ただ、事件直前(元禄十四年)での評価として「短慮」と評されていたのは、非常に興味深いものがある。

『千坂兵部日記』に見える上野介の暗黒面
因みに、上杉綱勝の死因について、吉良義央による毒殺説がある。これは綱勝が妹の嫁ぎ先の吉良家を訪れた直後に発病し、その後病状が悪化していることから唱えられた説あり、小説や赤穂事件の解説書でも取り上げられることが多い。綱勝の病状については当時の上杉家江戸家老千坂高治の「千坂兵部日記」に詳しい。

『梶川日記』

与惣兵衛は、茶坊主に上野介を呼びに行かせている間、内匠頭の姿が見えたので挨拶をした。その際、特に異変を感じることはなく、内匠頭は松乃廊下に面する下の部屋の自席に戻った。そこへ上野介が白書院の方からやって来たので、廊下の曲がり角の柱のところで、相対面し、話をしだした。そこへいきなり上野介の後ろから「この間の遺恨覚えたるか!」と叫んで、切りつけた者がいた。よく見ると先ほど挨拶をしたばかりの内匠頭であった。上野介は、振り向きざま一太刀で額を切られ、逃げようとしたところを後ろからまた一太刀背中を切られ、うつ向きに倒れた。

刃傷後の内匠頭は速やかに大広間の奥に連れていかれ、その後柳の間に移されたのだが、その間も大声で叫び続けていたことが記されている。ただ、直接的には何に腹を立てていたのかは、その口上ではよくわからなかったようである。一方で非常に気になるのは、当日の「御使の刻限」の急な変更である。つまり勅使の都合で登城・拝謁の時間が早くなることは決して不自然ではないが、当日の朝になっての急な変更であったため、関係者が慌てた可能性はある。上野介はその件で老中との打ち合わせを含め、朝からさまざまな調整を行っており、多忙を極めていたと想定することは可能であろう。そして肝心なのは、その件が内匠頭の耳に入っていたのかどうかなのである。決して意図的に連絡しなかったわけではないのであろうが、内匠頭本人はこれを単なる手違いとは思えない何かを感じたのかもしれない。

梶川与惣兵衛がそこにいた理由

十四日、梶川与惣兵衛頼照は、御台所の使いの役目があり登城していた。その際、儀式の刻限が早まったとの情報を得たが、その詳細を吉良上野介義央に直接確認しようと思い、朝から本人を探していたという。結果、その絡みで事件に巻き込まれることとなったのだが、この与惣兵衛が記した『梶川日記』は、松乃廊下での刃傷事件を詳しく記している可能性が高く、貴重な同時代史料と言えるだろう。

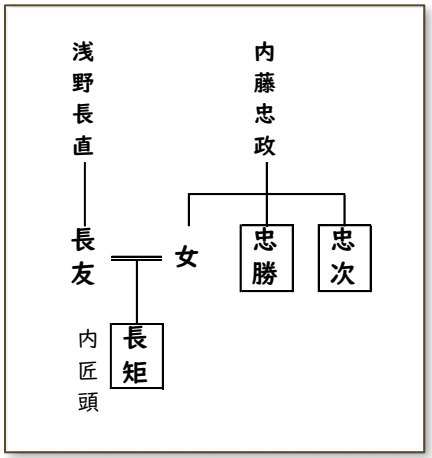
※但し、現存は写本のみ。東京大学史料編纂所本「此間の遺恨覚えたるか」、東大図書館本「声かけ切り付け」とある。

上野介への事情聴取

一方の上野介は、終止「身に覚えがない」と言い続けていたという。と同時に傷の治療を受けていたのだが、年齢からなのか、なかなか血が止まらなかったようだ。そこで大目付仙石久尚の指図で、南蛮外科医の栗崎道有を呼ぶことになったらしい。この時神田明神下にいた道有は、急ぎ登城して上野介の治療に当たった。額の傷を六針、背中の傷を三針縫い、とりあえず外科治療を終わらせたが、なぜか上野介は元気がなくぐったりしたままであったという。道有は、自分が食すると偽って湯漬けをつくらせ、それを上野介に与えると、あっという間に二杯をたいらげ、途端に元気になった。なんのことはない、上野介は朝から多忙で、何も食べておらず、腹が減りすぎてぐったりしていただけだったのだ(血を流している上野介に飯を与えることは、穢れを嫌う役人は取り合ってくれないため、道有は自分が食すと偽って湯漬けをつくらせたとする論考もある)。こうしてみると、上野介の疵はそれほど重症ではなく、精神状態も治療後は十分落ち着いていたことが窺われる。

増上寺刃傷事件

内匠頭長矩の生母は志摩鳥羽藩内藤忠政の娘である。彼女には、和泉守忠勝という弟がおり、実はこの忠勝は延宝八年(一六八〇)、丹後宮津藩主永井信濃守尚長を殺害するという事件を起こしてしまっているのである。いわゆる**「増上寺刃傷事件」**である。日ごろから仲の悪かった忠勝と尚長であったが、不幸にも徳川家綱七十七日法要の警備を命じられた。その法要の最中に、老中からの奉書を見せなかった尚長にカッとなった忠勝が脇差を抜いて刺殺したというのが事件のあらましである。まさに「短慮」そのものの所業と言わざるを得ない。忠勝は翌日青龍寺において切腹、御家は断絶。まさに二十一年後に起こる赤穂事件とそっくりな末路を辿ったわけである。幕府の重要な儀式の最中に大名が大名(高家)に切りつけるというとんでもない事件を起こした両名が、叔父・甥の間柄だったというのも非常に示唆的である。また、その忠勝の兄忠次は病弱により家督を辞退したと伝わるが、実は精神障害だったとの噂もあったようだ。こうしてみると、長矩は内藤家の遺伝子をしっかりと受け継いでしまったと言えなくもない。因みに忠勝は刃傷後に遠山頼直に抱き留められており、そんなことまでもそっくりな二つの事件なのである。



上野介からのハラスメントはあったのか？

①浅野側からの適度な賄賂がなかったことを恨んだ上野介が指南をせず嫌がらせを行なったのか？ありえない話である。饗応役の儀式におけるミスは即指導役である高家肝煎りの落ち度になるため、現実的ではない。賄賂については、浅野家および吉良家双方にそれにかかわる記録はまったくない。ただ、万石以上の大名から数千石程度しかない高家への謝礼金は、常識的な範疇で定例化していた可能性はある。
②塩田経営につき、この分野で確実に市場シェアを有していた赤穂藩にその技法を学ぼうとしたが断られ、上野介がそれを恨みに思って嫌がらせを行なった。三河国にも塩田はあったが主に隣の吉田領に集中していた。そもそも吉良家は、上野介の時代には塩田には力を入れてはおらず、逆に新田開発に注力をしていた可能性が大である。

接待費用に関する意見の違い

四十七士の『堀部弥兵衛金丸私記』(あきざね)に、吉良上野介は「殿中に於いて、諸人の前で武士道が立たないようなひどい悪口を言った」と書いてある。人から聞いた話としてはいるが、事件直後の記述なので信憑性は高い史料と言える。これを傍証するが如く、尾張藩士の日記『鸚鵡籠中記』にも、上野介が老中の前で「浅野殿は万事不調法で言うべき言葉もない」と言上したとあるので、出所の違う史料から同様の状況が見て取れるのである。これらのことは、おそらく饗応役の接待費用の額をめぐって意見が食い違ったことから、上野介がつい洩らした可能性が高い。それを称する一次史料がある。赤穂藩士の俳句の師匠だった水間沾徳(みずませんとく)の『沾徳随筆』に「例年千二百両かかる勅使饗応役の費用を、長矩が七百両しか出さなかったため、長矩と義央が不仲になった」と記している。同時代の記録であるだけにかなり信憑性は高い。一回目の饗応役を務めた時と比べて、二回目のときは大幅に物価が上がっていたが、長矩がそこを理解していなかった可能性はある。加えて長矩が、言い出したら一歩も引かない性格であったことも考えられ、その性格もかなり影響していると言っていい。しかし、これらの記述が事実であれば、内匠頭が上野介に対し、遺恨をおぼえるのも無理はない。
一方、内匠頭は小刀を振り回しただけで、突き刺しに行っていないことから、果たして殺意があったのかどうかはわからない！確固たる殺意があれば、払うのではなく、突き刺しに行っているはずである。したがって、単なる思い込みにより勝手に激怒してしまい、その激情を制御できずに抜刀して暴れまわっただけなのかもしれない！

刃傷直前の状況を想定してみる

①十四日の朝、儀式の刻限が急遽変更された
②その為、吉良上野介は調整のため朝から多忙であった(食事もとれないほどであったことが後で判明する)
③しかし、多忙の中、偶然出会ったもう一人の饗応役伊達左京亮にはそのことを伝えた
これは内匠頭にはわざと知らせなかったわけではなく、あくまでも左京亮に偶然出会ったからに他ならない
④御台所の使いで登城した梶川与惣兵衛は、刻限変更になったことを詳しく聞くため上野介を探していた
⑤その際、内匠頭を見かけた梶川は、挨拶とともに刻限変更の件を彼に尋ねた可能性が高い
⑥内匠頭は刻限変更の件は知らなかった(おそらく朝からその時まで上野介に会えなかったのだろう)
⑦不審に思ったか、詰め所に戻った内匠頭はそのことを左京亮に確認したところ彼は知っていた
⑧ここではじめて内匠頭は激怒する、何故上野介は自分にはそのことを話さなかったのか？と
上野介とは費用の件で行き違いがあったことを思い出し、大事なことを故意に通達しなかったと思い込んでしまった
⑨このように内匠頭の怒りが込み上げてきたちょうどその時、上野介が白書院のほうから姿をあらわした
⑩激情している自分をコントロール出来ず、上野介を斬りつけた

☞ この仮説が正しければ、吉良上野介にとっては誠に迷惑千万な事件であったわけである。しかも翌年には、浅野旧臣に屋敷に討ち入りされる、息子の左兵衛義周は改易になる、など文字通り踏んだり蹴ったりである。こうした結果を踏まえると、あまりにも不運が付きまとった吉良家であった。

『多門伝八郎覚書』

将軍綱吉は、大切な儀式の場を血で汚した内匠頭を許さず、即日切腹を命じる。江戸城平川門から出された内匠頭は、未の下刻(午後三時五十分)田村右京大夫建顕の屋敷に預けられ、そこで切腹を仰せ付けられることとなる。これら田村邸での一連の出来事は『多門伝八郎覚書』に詳しいのであるが、その記述は俄かには信じられない部分が多々ある。一方の田村家にも三種類の同時代記録

①『一関藩家中長岡七郎兵衛記録』
②『一関藩家中北郷杢助手控』
③『三月十四日御用書留抜』　が残っている。

片岡源五右衛門の「主従の暇乞い」

ドラマなどで有名な片岡源五右衛門の「主従の暇乞い」であるが、これも講談・浪曲の世界であり、おそらく伝八郎プロデュースが影響していると思われる。そもそも一般的には切腹の場所・執行時間などは非公開である。それをどのような伝手で聞き出したのか疑問である。加えてこの日の鉄砲洲藩邸は引き払うための後始末で大混乱状態であり、そんな中一人外へ抜け出せることなど出来そうもない。おそらくこれは、『長岡記録』にある、内匠頭が家臣にあてた最後の伝言といわれる『此の段兼て知らせ申すべく候へ共、今日止む事を得ず候故知らせ申さず候、不審に存ずべく候』の言付け先が、源五右衛門と磯貝十郎左衛門であったのを多門伝八郎が想像を膨らませて創作したのであろう。しかもはじめは暇乞いに来た片岡を門前払いしたのだが、その後伝八郎自身が「一目くらい合わせるのが慈悲である」と取りなして屋敷内に入れたことを記し、あたかも高潔な人格者としての自分を吹聴しているようにも見える。

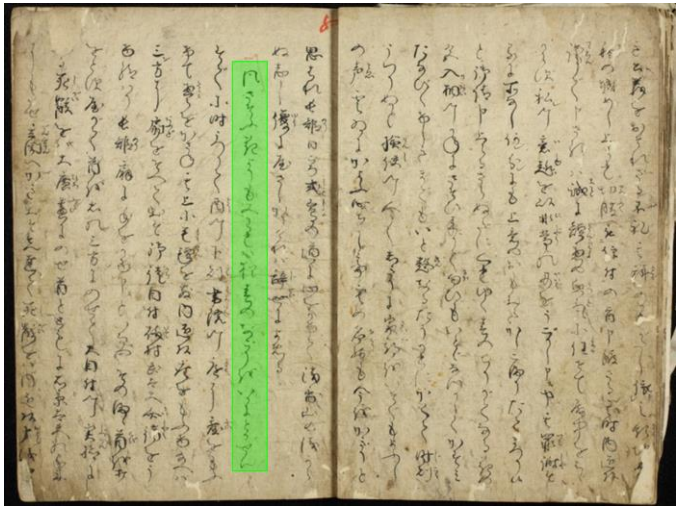
吉良の様子をおしえる伝八郎と介錯の刀の話

『伝八郎覚記』は、切腹の上意を承ったあと内匠頭がその後の吉良の様子を尋ねたと記している。それに対し、多門が「傷は二か所で浅手のようだが、なにぶんにも老人のことであり、急所を強くついたこともあり養生の程はおぼつかない」と答えた。それを聞いた内匠頭は、落涙の体にてにっこりと笑ったという経緯が記されている。しかしこれもどうであろうか。ドラマの脚本としては非常に面白く、これまた伝八郎プロデュースであろう。もちろん、田村家側の記録にこのようなやり取りがあったとの記述は一切ない。いずれにしろ、刑の執行が淡々と行われた事しか書かれていないのである。同様に切腹の直前に内匠頭が「拙者の差料をお預けしたはずだが、その刀で介錯してもらいたい」と言ったとあるが、これも眉唾である。果たして切腹する本人が自分の刀で介錯してほしいと言うだろうか。但し、この描写も伝八郎のしたたかな演出が見え隠れしているのである。次項の「辞世の句」で触れるが、すなわちその刀を取り寄せることで多少のインターバルが出来し、内匠頭が句を詠む時間を捻出させたと見なせるのである。

内匠頭が詠んだ辞世の句

この句は『多門伝八郎覚書』以外、田村家の史料には全く見えず、しかも浅野家側の記録にもない。実際に家臣宛の伝言は存在した可能性は高いが、言付けを託しながら同時に辞世の句を読むという流れは少々不自然に感じると説く研究者もいる。他の史料から刑の執行状況を見てみると、①『一関藩家中長岡七郎兵衛記録』には、大目付庄田下総守が上位の趣を申し渡し、長矩がそれに答え「今日不調法なる仕方如何様にも仰せ付けらる儀を切腹と仰せ付けられ有難く存じ奉り候」と述べ、それが終わると障子を開けて庭におり、毛氈(もうせん)の上に着座、小脇差で執行し、介錯が仕舞う、という実に淡々とした様子が記されている。③『三月十四日御用書留抜』は、暮れ六つ過ぎ、長矩は徒目付衆同道で出られ、上意の趣を庄田が言い渡し、長矩のお請けの言葉もよろしくあって、そのまま白洲へ出て切腹なされ、介錯は磯田武大夫が手際よくやった、と記される。双方には、もちろん辞世の句を詠んだという記述はない。そもそもこれら同時代史料からは、切腹の前に、墨を摺って句を詠むだけの間があったとは到底思えない、淡々とした時間の経過が窺い知れるのみである。ただそこを、伝八郎は見事な演出力で句を詠む時間を創り出したのである。

【大阪市立図書館デジタルアーカイブより】



実は、ここに非常に気になる句を収集する文書がある。それは、都乃錦(宍戸光風)という浮世作家が著した『**播磨椙原(はりますぎはら)**』という講談風の作品である。

そのなかに、なんと「風さそふ花よりも亦われは猶春の名残りをいかにとかせむ」という句が記載されているのだが、多門の『覚書』に記される内匠頭の辞世の句と酷似しているのは明白である。『播磨椙原』は忠臣蔵の原型とも言われる講談風の作品であるが、もちろんほとんどがフィクションである。どのような経緯で詠まれた句であるのかも明確ではない。発刊時期は、宝永八年(一七一一)との事であり、ちょうど伝八郎が『覚書』を執筆している最中とみなしても不自然ではない。憶測を重ねれば、伝八郎は早速この『播磨椙原』を入手し、その中のこの句が、内匠頭切腹時の心情にフィットすることから、思わず『覚書』にこれを流用してしまったのかもしれない。

討ち入りまで

内匠頭切腹から討ち入りまで実に一年八カ月かかっている。この間、大石内蔵助以下赤穂浪士の動静を幕府が全く把握していなかったのであろうか？事を起こす可能性が非常に高いこの危険な集団を監視していないはずはない。
ただ、赤穂浪士による吉良邸への討ち入りについて、あまりにも見事に実施されたことを踏まえれば、何かしらの幕府の関与を疑わざるを得ない。言い方を変えれば、その動静をつぶさに把握していたにもかかわらず見守っていたと想定することは可能であろう。そんななかで、暗に幕府の直接的な協力としか思えないものに吉良邸の本所への移転が挙げられる。元禄十四年九月、吉良上野介の屋敷は江戸城の城郭内、呉服橋門のすぐそばにあったが、隅田川の東の本所松坂町へ移されたのである。これは自主的な引越しではなく、幕府からの命令である。

吉良邸が呉服橋門内から本所に屋敷替えしていると言う事実

転居命令における幕府の狙いについてはさておき、江戸城外への転居によって、討ち入りが以前の場所よりも容易になったことは間違いない。ちなみに、引越し先は松平登之助の空屋敷であったため、改築が行われた。この吉良邸転居により、今すぐにでも討ち入りを行いそうな勢いを持つ堀部安兵衛ら江戸急進派は、この事実を手紙で内蔵助に知らせている。以前から、江戸急進派は討ち入りの決行を内蔵助に催促していたが、内蔵助は時期尚早だと慰撫に務めていたことが、書簡の往来記録で明らかになっている。血気盛んな江戸急進派といえども、吉良邸が江戸城内にある時にはさすがに手が出しにくいが、城外の本所近辺なら討ち入りはかなり容易になる。吉良邸の転居は江戸急進派を刺激し、今にも暴発しそうな勢いになったため、内蔵助は慰撫の使者を送らざるをえなかった。
堀部安兵衛の「堀部武庸(ほりべたけつね)筆記」には以下の記述がある。
①屋敷替えについては、当初の吉良邸東隣の蜂須賀家が「赤穂の浪人たちが討ち入るかもしれないと危惧し、昼夜にわたって警備しているため、家中が困窮して迷惑だから、他に移転してほしい」と幕府に働きかけたためという話がある
②上野介の従弟婿にあたる松本藩主水野忠直は、御下の座頭が上野介の屋敷替えは公儀が浅野家家来に「討ち候へ」といっているようなものだと言ったので、水野も「成程その通りだ」と答えたと親しい人に語ったらしい。
③上野介の屋敷が本所あたりに替わるらしい。討ち入りを実行する時節がきたともっぱら取りざたされている、という江戸の噂を書状に書いて内蔵助に知らせている。

浄瑠璃坂の仇討事件

「忠臣蔵」の67年前に行われたのが「浄瑠璃坂の仇討ち」である。江戸・市ヶ谷の浄瑠璃坂とは、佐土原町1丁目と2丁目の間の坂のことで、昔この坂の上であやつり浄瑠璃の見世物小屋が掛けられていたので、この名前があるという。仇討ちは、寛文12年2月3日、この坂の上で起きた。仇討ちを恐れる側は、60人という人数で守り、討っ手の側は40人が武装して屋敷を襲った。その規模といい、襲撃のやり方といい、67年後に赤穂浪士のリーダー・大石内蔵助（おおいしくらのすけ）が、参考にしたといわれるほどの仇討ちであった。

『浅野内匠家来口上』の解釈

赤穂浪士が吉良邸へ討ち入りした際、したためた「浅野内匠家来口上」というものがある。二通つくって、一つは吉良邸内に残しておき、もう一つは引き上げの途中、吉田忠左衛門と富森助右衛門が大目付仙石久尚に提出したことが伝わっている。大石内蔵助は、なにゆえ吉良上野介を討たねばならないのかを広く一般にアピールしたいために書いたものだと訴えているのである。因みに、文面から非常に興味深い事実を垣間見ることができる。すなわち、主君内匠頭が刃傷に及んだ件につき、「*当座遁れ難き儀御座候か、*」とあり、他にやりようはなかったのであろうか？と主君の心の内を思いやりながらも、その行動に走った理由を掴みかねていた、と解釈できることなのである。

つまりさすがの内蔵助も、実際のところ刃傷に至った原因は何だったのか、主君は何に怒っていたのかは全くわからなかった。ただ一つ言えることは、殿中において後先考えずに刃傷に及んだことは事実である。したがって、それにはよほどのことがあったのであろうと、主君の心中を察したまでのことなのである。だから我々**残された家臣としては、吉良を討ち洩らした主君の無念さだけを受け継いで討ち入りを実行した**と主張しているのである。こうしてみると、内蔵助の主張はよくドラマ等でとりあげられるような、「喧嘩両成敗に反する方落ちの沙汰を下した幕府への抗議」であるとか、「昨今の乱れたご政道を正す為」であるとか、このような大げさな理由付けとは少々趣が違うものと言えそうである。

浅野内匠家来口上
去年三月、内匠儀、伝奏御馳走の儀に付き、吉良上野介殿へ意趣を含み罷り候處、御殿中に於いて、当座遁れ難き儀御座候か、刃傷に及び候。時節場所を弁えざる働き、不調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地赤穂城召し上げられ候儀、家来共まで畏れ入り存じ奉り、上使御下知を請け、城地指し上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩の節、御同席御抑留の御方これ在り、上野介殿討ち留め申さず、内匠末期残念の心底、家来共忍び難き仕合せに御座候。高家御歴々に対し、家来共鬱憤挿み候段、憚り存じ奉り候得ども、君父の讐、共に天を戴くべからざる儀黙止難く、今日上野介殿御宅へ推参仕り候。偏に亡主の意趣を継ぎ候志まで御座候。私共死後、若し御見分の御方御座候はば、御披見願い奉り、斯くの如く御座候。以上
元禄十五年十二月　日　浅野内匠頭家来　大石内蔵助

ただ、内蔵助本人は、加えて断絶した赤穂藩の名誉を重んずることも忘れてはおらず、その手段としての討ち入りという捉え方をしていたのかもしれない。また内蔵助以外では、特に急進派と言われた堀部安兵衛・奥田孫大夫らはあくまでも“武士の一分”にこだわっていた。藩の再興云々よりも武士としての自分たちの面子が第一だったのである。それとは別に、旧側近派である片岡源五右衛門・磯貝十郎左衛門などは、藩主内匠頭に対する哀惜の念から純粋に主君の仇を討ちたいと考えており、言うなればごく普通の仇討と捉えていたと言うべきであろうか。

最後に、その他大勢の義士たちの考えは、彼らとは少々違った立ち位置であったと思われる。彼らは、討ち入りが“人としての務め”であって、残されてしまう家族に未練があっても、それを顧みることが出来ないことも知っており、その上で武士である以上、こういう状況下に於いては自分の命を捨ててもかまわないという思考になっていたと考える。こうした義士たちに私たちが感動をおぼえるのは、なにかの目標の為に命を捨てて行動する自己犠牲の精神があるという単純な理由からなのである(山本博文著書より)。

参考図書：佐藤孔亮『忠臣蔵事件の真相』、谷口眞子赤穂浪士の実像』、山本博文『これが本当の「忠臣蔵」』